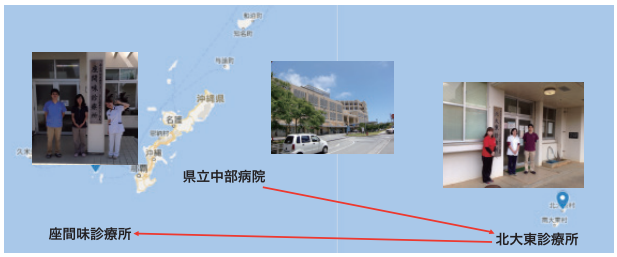
最新医療紹介

沖縄での離島医療の経験

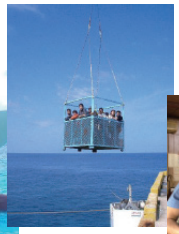
総合診療科医師　森　英毅

総合診療科の森 英毅です。私は当院での4年間の研修後本年4月まで沖縄県で離島診療に主に従事しておりました。今回は沖縄の離島医療について紹介させていただきます。



沖縄の離島と離島診療所

沖縄県には363の離島があり、うち40が有人島です。島の数としては長崎県（長崎県は971）よりも少ないものの、最西の与那国島から私が赴任していた最東の北大東島まで東西約1000km、南北約400kmといった広い海域に人口500～3000人規模の小離島が散在していること、「島が違えば国が違う」と言われるほど、離島ごとに文化や産業など地域性がかなり異なる点が特徴的です。例えば私が最初に赴任した北大東島は約100年前に八丈島から移民が住み着いた島でしたが琉球と八丈が入り混じった特殊文化で、さとうきびなどの一次産業がメインの高齢者の多い島でした。他方その後赴任した慶良間諸島－座間味島は世界有数のダイビングスポットで、全国のみならず世界各地から観光客が押し寄せる三次産業の島で若い人の多い島でした。減圧症や溺水などの海の事故も多く大東諸島とは診療内容も大きく異なっていました。沖縄県は県立病院が主導で離島医療を支えてきた歴史的経緯があります。40の有人離島のうち18カ所に沖縄県立病院附属の診療所がありますが、そのほとんどが医師1人、看護師1人、事務員1人の3人体制の診療所であり若手医師の数年単位のローテーションでカバーされているのも特徴です。



北大東島

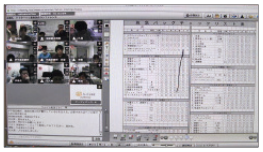
「その医者のレベルがその島の医療レベル」

沖縄の島医者の中で語り継がれる言葉です。離島診療所に赴任したものの機材、検査、使用できる薬剤も限られる中、新生児から超高齢者まで全科に渡って一人でカバーしなければならない島の環境では自分の実力のなさを思い知らされることが度々ありました。特に最初に赴任した北大東島は沖縄本島から東に約400kmの太平洋に浮かぶ絶海の孤島。沖縄本島の高次病院まで搬送するのに要請から最低でも5時間はかかります。天候でヘリも飛べないことも多く、緊張の中診療所で患者さんとともに夜を明かすことも多かったです。自分のやれることがその島の医療そのものという厳しさはありましたが、急性期医療のみならず予防医療の重要性や家族や地域全体を診る視点の大切さを学ぶことができたのは大変大きな財産だったと考えています。

座間味島

島での経験を通して

初期研修の先生方へは、基本的な病歴聴取のスキルや身体診察、生涯学習の方法をきちんと身につけてほしいと考えながら総合診療科では指導にあたっています。これらの技術には華々しさはありませんが何科になっても、どんな環境でも有用な基本となるスキルだと考えているからです。また、後期研修の先生方にはプライマリケアの専門研修として予防医療や家族ケア、地域ケアなどの家庭医療のスキルを実践的に身につけて欲しいと考えています。沖縄県は離島にいながらにして県立病院から毎日Webレクチャーやカンファランスなど遠隔教育ツールが大変発達しており、私も日々勉強させてもらいました。沖縄の良い点を教育病院である当院でも取り入れることができるよう現在当院の後期研修のプログラムを現在準備中です。プライマリケアに興味がある先生はお気軽にお声かけいただければと思います。



Web会議システム
ヘリ搬送症例について他の離島とカンファランス